

大阪公立大学医学部附属病院医療連携

第48回「Face to Faceの会」たより

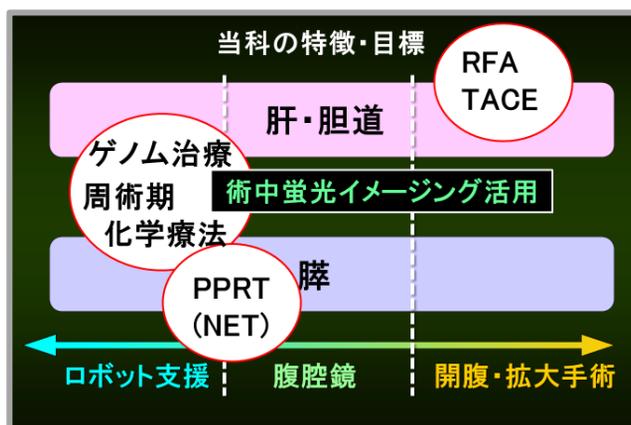
一般演題 I

『OMUの肝胆膵手術：すべてを揃えて最善の一手を打つ！』



肝胆膵外科
診療科部長 石沢 武彰

OMU(大阪公立大学)肝胆膵外科の目標は、肝胆膵外科治療に関するほぼ全ての治療選択肢を安全に提供する体制を整備し、その中から個々の患者さんの病態に応じた「最善の一手」を打って治療に貢献することです。事実、肝胆膵外科学会高度技能専門医 7名、内視鏡外科学会技術認定医 4名、ロボット支援下肝切除、膵切除各2名、という布陣で患者さんの治療にあたっています(2023年3月現在)。昨年は約120件の肝切除(ロボット支援手術を含む低侵襲手術>50%)、約100件の膵切除(同>30%)を、手術関連死亡ゼロで実施することができました。これも、日ごろから地域の先生方に多大なご支援を頂いているおかげでございます。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



根治性と安全性の両立

2022年の成績

- 肝切除 123件(低侵襲 54%)
合併症率 7%(前年比 10%減)
- 膵切除 101件(低侵襲 34%)
合併症率 32%(前年比 5%減)

癌手術関連死亡ゼロ

『消化器外科領域におけるロボット手術の現況』



消化器外科
診療科部長 前田 清

癌の手術治療には癌を根治することとQOLを維持することの両立が求められます。当教室では患者さんの体への負担と合併症のリスクを最小限にし、しかも回復が早い低侵襲手術を追求してきました。低侵襲手術のひとつとして我々はロボット支援手術を積極的に導入しています。2018年4月より食道癌、胃癌、直腸癌に対するロボット支援手術が保険収載され、当教室のロボット支援手術件数も年々増加しております(図1)。2022年はCovid-19による診療制限がある中、108件(食道癌33件、胃癌19件、大腸癌56件)と2021年の1.5倍以上の患者さんに対してロボット支援手術を行いました。

当大学ではIntuitive surgical社のda Vinci Xi® surgical systemが2台設置されておりますが、da Vinciには高解像度には高画質な3Dハイビジョン、手振れ防止機能、多関節機能を有するロボットアームが備わっており、より繊細で精密な手術を行うことが可能です(図2)。

腹腔鏡手術では可動域に制限のある骨盤や胸腔内の操作においてもロボット手術であれば、術者の思い通りの操作が可能となります。このため、ロボット手術では従来の開腹手術や腹腔鏡手術よりも排尿機能や性機能の温存率が高く、肛門温存にも有利であることが報告されており、術後のQOL維持にも寄与できるものと考えられています。また、食道癌では術中操作で反回神経を過度に牽引すると嘔声や誤嚥性肺炎が生じますが、ロボット操作であれば、反回神経の損傷も最小限に抑えることが可能です。胃癌の術後合併症のひとつである膵液漏もロボット手術の方が低率であることが報告されています。

このようにロボット手術は消化器癌の根治性を損なうことなく、患者の術後合併症の軽減、QOLの維持に役立つものと考えております。

その他、当科では化学療法、放射線療法も活用することにより、治療成績の向上が見られております。対象の患者様がおられましたら消化器外科にご紹介いただければ幸いに存じます。

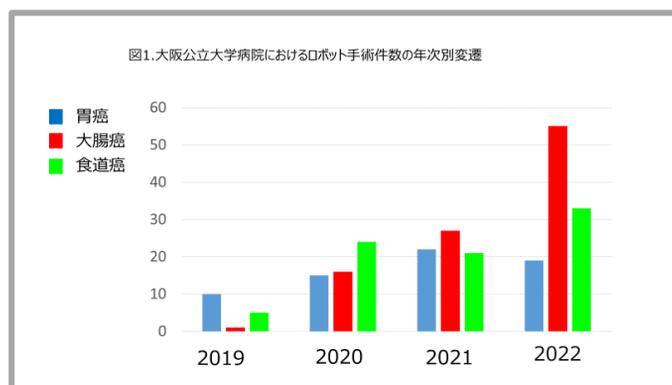


図1

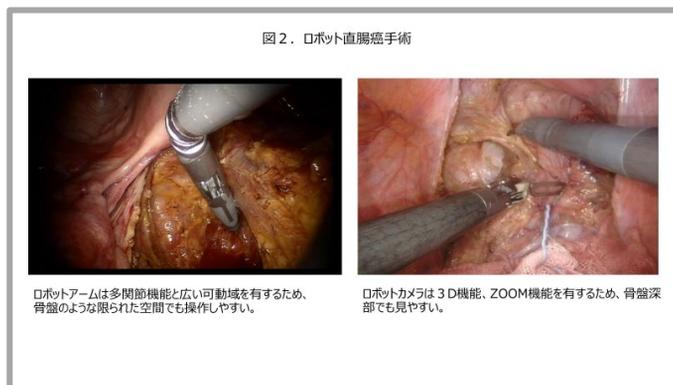


図2

次回開催のお知らせ
第49回Face to Faceの会
日 時: 令和5年6月3日(土) 16:00~17:30
場 所: あべのハルカス25階 貸会議室